

かたりべ 58

豊島区立郷土資料館だより



池袋3丁目ミノヤ洋品店「ドイツ製のレジスター」

2000年4月26日（水）撮影

郷土資料館で “かたりべ” に！

今日は、五〇年間働いてくれたレジスターの現役最後の日です。「長い間よく稼いでくれました。これのおかげで子ども二人を育てることができたんですよ。ありがとう

いですね。いろんな思い出がよみがえりますね。ここの角の傷ですけど、これはね、一本の、紙でくるんだ硬貨を崩す時、ここでトントンと叩いてましたから、その跡ですね。ずいぶん色もあせましたね。売上げの数字のボタンを押して、それから右のハンドルを回すんですよ。そうすると、ガチャン、ガチャンと大きい音ですよ。今は手動でしていますけど、電動だったんですよ。調子が悪くなって、引き出しが半開きになったから手動にしたんですよ。重たくて押しもびくともしません。今日で最後だからお酒でもあげましょうね。ご苦労さまでした」「それじゃあ今夜はいただこうかな。こんなこと初めてだ。次の勤め先はここから近いらしいんだ。郷土資料館といったらかな。これから展示室で自分の歴史を語ろうと思ってるんだ。なんだか恥ずかしいな。店のおやじさんが時々油を差してくれたけど、学芸員の人もやってくれるかな」「頼んどいたよ。長いことありがとう。がんばれよ」

第4回収蔵資料展「こどもの本―児童文化の担い手たち」を終えて

今年1月27日～3月31日（延べ52日間）

に開催した展示会では、四〇二二名の入館者を迎えました（1日平均77名）。このうち区内小学校10校の見学を含む団体入館者数は六一四名でした。また期間中に行なった展示説明会と童謡鑑賞会の参加者数は45名で、好評を得ました。（その後一部展示替えを行ない、5月14日まで展示期間を延長しました。）

また一七名がアンケートに回答いただき、貴重なご意見をいただきました。ここにその一部をご紹介します。

◆「赤い鳥」について調べていたので、大変なためになった。（区内／13才女）

◆私は戦前は少年クラブ、ノラクロ等戦時色の濃いものが多かった時代で、今回の様に前の時代は心豊かな本が多かったことあまり知りませんでした。あの時代にこの様な本を多く読んでいれば：と思います。（北区／66才男）

◆現在子どもを取り巻く文化状況はなか

なか一言では語れぬ程厳しいものがあります。赤い鳥の原点に立ちかえて今自分のあるべき事を考えるのに大変良い展示でした。（新宿区／50才男）

◆大正末から昭和一ケタの池袋・目白中心の企画にきわめて大きな意義がある。（練馬区／69才男）

◆資料の収集整理など大変なご苦労だったと思います。豊島区の文化的遺産とでもいべきものが、こんなに沢山あることはほりでもあるし、また大切にしなければならぬことと思います。（区内／80代男）

◆羽仁夫妻や童画家たち・作家たちの人間像や関係を追った展開があると面白かったかもしれない。（千葉県／22才女）

◆博物館の内容らしく、地図・統計が充実していたと思います。これらの情報以上に、本の表紙や口絵などの原画がより多くみられるとよかったです。（墨田区／32才女）

◆小学館の学習雑誌による全雑誌の展示もやって下さい。（区内／30才男）

◆豊島区が児童文学の担い手とする作家達といかにつながりが深かったかを改めて教えていただきました。過去形にならず何らかの形で21世紀にもつなげてほしいものです。（区内／53才女）

―皆さんのご意見は今後の資料館活動に反映させていきたいと思っています。

今回の展示を終えた感想として、収蔵資料展という制約から、展示構成にそった資料が十分に集められなかったという反省があります。また展示内容や表現方法が堅苦しく、こどもには難解な展示になってしまったようです。そこで、小学校見学ではわかりやすい展示説明を心がけ、毎回蓄音機による童謡鑑賞会を行いました。また子供用リーフレットを作成し、展示に興味を抱いてもらうような工夫を試みました。こども向け展示は大人数の展示に比べ様々な教育的配慮が必要であることを改めて実感しました。今後の資料館の展示課題の一つとして取り組む必要があるでしょう。【横山】

紹介

「豊島の集団学童疎開資料集」を活用した二冊の本

当館調査報告書の中のシリーズである「豊島の集団学童疎開資料集」は現在、第六集まで刊行されています。これは一九八七、八八年の特別展『さやうなら帝都 勝つ日まで―豊島の学童疎開』、『子どもたちの出征―豊島の学童疎開・2』を機に提供された資料を順次、編集・刊行しているものです。この資料集を活用された研究書が二冊出版されていますので、紹介します。

一つは逸見勝亮氏（北海道大学教授）の『学童集団疎開史 子どもたちの戦闘配置』（一九九八年発行、大月書店）です。この本は、学童疎開の立案・実施から終了までを全面的に追った、はじめての研究書といえるものです。

逸見氏は、公文書をはじめ多くの第一次資料を駆使して、学童疎開の全体像と矛盾とに迫っています。「豊島の集団学童疎開資料集」はいくつかのところで使

われていますが、とりわけ第六集所収の池袋第二国民学校教員尾佐卓朗氏の記録を「重要な論点を示してくれる」（一二三頁）として提示されています。引率教員の学童疎開に対する考え方と行動を明らかにする資料として用いられているのです。

もう一つは、大門正克（都留文科大学教授）の『民衆の教育経験 農村と都市の子ども』（ヘシリーズ日本近代からの問い・3）、二〇〇〇年発行、青木書店）です。この本は、近代日本における学校教育と家族との関わり、学校教育の受容過程を検討することを課題としています。その中の一つの章（第七章「学童集団疎開から戦後へ」）の中心材料となっているのが、「豊島の集団学童疎開資料集」第三集所収の吉原幸子日記（長崎第二国民学校六年学童の日記）です。大門氏は、ここでまず、疎開日記を読

み込むことによって、戦時下における都市の子どもの実像り方の一つの典型を描かれています。同時に、それにとどまらず、戦後、著名な詩人となられた吉原氏について、戦時中の日記と戦後の詩作活動とを対照・分析するという手法によって、戦争体験が戦後において、どのような戦争認識を生み出すかという課題に迫られています。

学童疎開の学術的研究は始まったばかりだといっていると思います。その中で両氏のお仕事はたいへん貴重なものといえるでしょう。現在、「豊島の集団学童疎開資料集」は諸々の事情で刊行を中断していますが、早い時期の再開をめざして準備中です。新しい論点を開く手がかりとなることをめざしています。（あ）
――＊――＊――＊――＊――＊――
☆豊島の集団学童疎開資料集

大好評評元先元中々☆

◎第三集（長崎第二国民学校 その1）

一七〇〇円

◎第六集（西巣鴨第一国民学校・池袋第

二国民学校） 一〇〇〇円

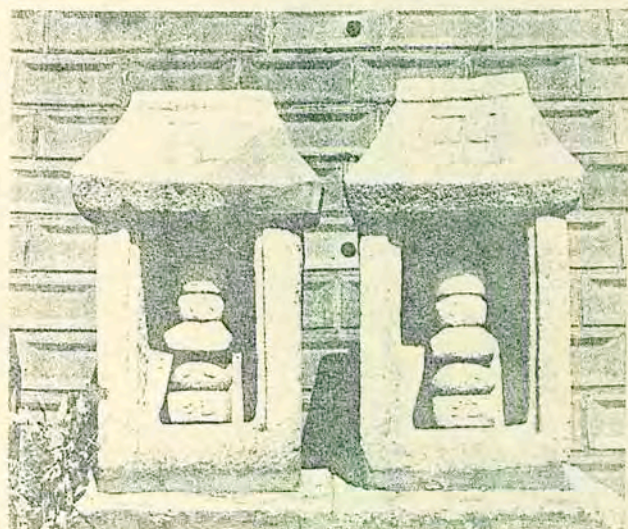
新・豊島氏紀行 《その2》

「茨城県利根町布川」

【来見寺】

前回ご紹介した豊島氏は、絵島生島事件に連座した一族でしたが、今回紹介するのは、一六二八（寛永五）年に江戸城内で刃傷事件を起こして御家断絶となった豊島明重（信満）へとつながる豊島氏ゆかりの場所です。

一四七七（文明九）年の太田道灌との



戦いで滅んだ武蔵豊島氏の一族は、その後所領のあった布川の地へ逃れたとされています。その布川に豊島三郎兵衛頼継という人物が開いた寺として頼継寺があります。この寺は江戸時代に来見寺と名称を変化させ現在に至っていますが、境内には明重が父頼重と母の菩提を弔うために建立したと思われる五輪塔の石殿があります（写真）。そして、この頼重の父親が頼継とされていますので、明重は祖父が開基したとされる寺に両親を弔っていたということになります。

布川豊島氏が武蔵豊島氏の系譜を引いているという確証は、未だありません。一族であったとしても、なぜ布川の地に移住したのかも不明です。今後とも一層の研究の深化が期待されます。（伊藤）

来見寺へのアクセス

◆JR成田線布佐駅からバス、布川横町バス停から徒歩一〇分◆近くに布川城址である徳満寺や布川神社もあります◆

□ 編集後記 □

ようやく58号をお届けすることができました。本来でしたら五月の末に刊行される予定でしたが、約二ヶ月の遅れになってしまいました。これも、すべて編集担当者の責任です。ここに深くお詫びいたします。

郷土資料館では、夏から秋のシーズンには歴史講座・収蔵資料展・地域史講座と一年間でもっとも忙しい時期を迎えます。おっと、近くの席から「年中だぞー」というお叱りのお言葉が聞こえそうです。（伊藤）

かたりに
(第一版)

No. 58

2000年7月30日発行

印刷／発行
豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

☎03-3980-2351